

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	中野区中央2丁目43-12
園名	ソラストなかのさかうえ保育園

1. 活動のテーマ

つくってみたい！なりきってみたい！やきそばから広がるおま
まごと

<テーマの設定理由>

五感を使って食育体験を行い、実際の体験を通し遊びの中で再現し想像力・表現力を育む

2. 活動スケジュール

10月 幼児クラス合同食育（やきそば作り）

→食材に触れ、調理の様子を見たり体験をする事で食への興味や関心を持つ。

11月

エプロンを導入し、やきそば作りを通しておままごとを楽しむ

1月

おままごとを広げる為に物品探し

3月

物品購入をし、更に興味を広げる

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

今までよりも大きいキッチン台を設置し、おままごとコーナーを作った。

「エプロン」を自由に着れる用に置いた。

- ・キッチン台
- ・おままごと用 鍋・フライパン・まな板
- ・おままごと用 野菜・果物
- ・おままごと用 包丁・スプーン・フォーク

4. 探究活動の実践

やきそば作りを行い、3歳児が野菜洗い、4歳児が皮むき、5歳児が包丁を使って切るという調理をし、本物の調理器具や食材に触れる体験を行った。野菜の洗い方調理が進み火を通す過程ではその中で「ジュージュ音が聞こえるよ!」「玉ねぎの匂いがしてきた!」「キャベツの色が変わったよ!」という驚きの声が上がっていた。

体験後、ごっこ遊びにも変化が見られ3歳児クラスでは野菜を優しく洗う真似をする姿や麵に見立てたチェーンを皿に盛り付け「やきそばです」と他児にふるまう姿が見られるようになった。

本物の体験(音や匂い、食材の変化)によって子ども達の中の表現力や想像力において豊かなものとなり、ごっこ遊びの発展へと繋がっていった。

また、異年齢交流の中で幼児クラスのごっこ遊びに1歳児・2歳児が興味を持つ姿があった為、年上児への憧れや真似をしたいという意欲を大事にし、1・2歳児クラスにもおままごとコーナーを設置した。2歳児クラスでは、保育者に皿に乗せた野菜を「どうぞ」と振る舞う姿や「左手はねこの手にするんだよ」等子ども同士のやり取りが見られた。

今回の実践では、一つの食育活動から始まった小さな興味が、幼児クラスごっこ遊びへとつながった。さらにその姿を見た乳児クラスの興味につながり保育園全体で遊びの発展が続いている。

<活動の内容>

自由遊びの中で、おままごとに興味を持ち楽しむ

食育活動を経て食材を大切に扱う姿、調理工程がよりリアルにおままごとに再現されるようになった。新しいおままごとの玩具を使ったごっこ遊びでは、ただ皿に盛って完成ではなく、給食で出たメニューを作り保育園ごっこを展開させ、さらにイメージを広げていく様子があった。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

3歳児の自由遊びの中で、エプロン・おままごとで個々に具材を調理して遊ぶ姿が見られ、4・5歳児が遊びに参加すると互いにエプロンの着用を手伝いあう姿や調理して楽しむ姿が見られるようになった。また、キッチンのコンロに具材を乗せカチカチという音を楽しんだり「カチカチするの!」「楽しいね!」と話す様子も見られた。2歳児では、保育者からナイフ・まな板の使い方を伝えると遊びの中で「こっちの手はねこの手だよ」と教え合う姿があった。



5. 振り返り

今回の実践を通して、一つの食育活動から得た経験が小さな興味へと繋がり、幼児クラスのごっこ遊びを展開させ、さらにその姿を見た乳児クラスの興味へと繋がっていき、遊びの連鎖を感じる事が出来た。本物の体験の活動から、保育園全体の遊びの発展を生み出す素晴らしい機会となった。今後も子どもの興味や関心から広がる遊びを丁寧に取り、園全体で豊かな保育環境の設定が出来るようにしていきたい。

<振り返りによって得た先生の気づき>

本物の体験の遊びへの影響力の大きさや経験をした事で得られた「ジュージューという音」「食材の匂い」「色や硬さの変化」といった五感を通した子ども達の表現の引き出しを増やし、子ども達の想像力や表現力を豊かにし成長につながる事を実感する事が出来た。食育活動から見立て遊びやごっこ遊びの発展につながるという事に気づかされた。異年齢交流の中で幼児クラスの充実した遊びの姿が、乳児クラス（1.2歳児）にとっても影響があると実感した。また、各学年だけではなく園全体で交流を行う事で遊びや成長に繋がっていくと気付く事が出来た。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	中野区中央2丁目43-12
園名	ソラストなかのさかうえ保育園

1. 活動のテーマ

七夕から繋がるプラネタリウム作り

<テーマの設定理由>

五感を使って食育体験を行い、実際の体験を通し遊びの中で再現し想像力・表現力を育む

2. 活動スケジュール

7月 七夕会

→プラネタリウムを見ながら七夕の由来を知る

7月

プラネタリウムのしくみに興味を持ち、作ってみる。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

廃材(トイレットペーパーの芯・段ボール・箱)を自由に置いた。

画用紙・セロハンを用意した。

4. 探究活動の実践

日頃から親しんでいる廃材の中から「プラネタリウムになりそうなもの」を選び、ハサミやペン等を津使って穴分けたり、カラーセロハンを貼ったりして「光が通る場所」と「光が通らない場所」を作った。懐中伝統や携帯のライト機能を使って「穴が小さいと見えない」壁に近づけると光がうつる」といった光の性質を体験・発見する。その後室内を暗くして天井に映し出してみるのが、なかなか光が映らずどうしたら光がしっかりと映るかを子ども達で考え、大きいダンボール内に頭が入る空間をつくり、段ボール内に頭を入れ光を映し出すなどして新たなアイデアへと繋がった。

<活動の内容>

七夕でプラネタリウム鑑賞を行い、5歳児から「自分たちもプラネタリウムが作りたい」という声があった為、自由活動内でプラネタリウムづくりの活動を行った。

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

七夕会にて七夕の由来についてプロジェクターにてプラネタリウムを天井に写し鑑賞した。

そこから5歳児を中心に「自分たちでもプラネタリウムが作りたい」という声が上がったため「光」をテーマに設定する。

日頃から廃材遊びを行っているため、

廃材を活用しながら個々にプラネタリウムを作成することで、子どもたちの興味関心をさらに深めていく。

また、そこから光の出し方、光の見せ方など、子どもたちの興味関心を引き出しながら取り組んだ。

一つの箱を映し出そうとしている子に対して、距離がありうまく映し出せていなかった様子を見て保育者が他の園児に「箱の高さを上げて部屋が暗くなる」と言葉がけをした後、他の子と考えてみてねと促しをした。

園児同士で黒の画用紙を持って来て画用紙の貼る場所を確認したり、「ここ押さえてね」と話し合いながら別々で作っていたものを集まって一つのものを作るようになった。

〈活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉



5. 振り返り

最初は「個々に」作っていたプラネタリウムだったが、「暗くしないと見えない」という共通の目的（課題）が生まれたことで、自然と子どもたちが集まり始めました。一人では解決できない環境の構成（暗闇の確保）に対し、自分たちが作っていたものを持ち寄り、**「別々のものを集めて一つのもの（大きな暗い空間や合同のプラネタリウム）を作る」**という、5歳児ならではのダイナミックな協同性へと発展していった。目的を達成するために、お互いの意見をすり合わせ、自然と役割分担をしながら試行錯誤するプロセスは、今後のあらゆる探究活動の土台となる大きな成長となった。

<振り返りによって得た先生の気づき>

最初から「みんなで作りましょう」と設定しなくても、「暗くしないと見えない」という共通の課題（目的）が生まれることで、子どもは自然とつながり、個別の制作物がひとつの制作物になる素晴らしさを知る事が出来た。また、教えるだけではなく子ども達からのアイディアや考えを大切にし、保育士として「待つ」という姿が大切だと気づく事が出来た。教えるだけではなく子ども達からのアイディアや考えを大切にし、保育士として「待つ」という姿が大切だと気づく事が出来た。

→また、待つ中でも子どもたちが疑問に思っていることや上手くいなくて困っている際に、全てを手助けしてしまうのではなく、ヒントを与えてあげることでさらに思考力や創造力が育つと感じた。